

### イネ縞葉枯病の発生に注意！

#### ヒメトビウンカ第二世代幼虫の発生がやや早いため 6月下旬に防除に努めましょう！

[現在の発生状況]

- ① 平成 26 年 5 月下旬～6 月上旬に、県西地域および県南地域の小麦圃場で採取したヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルスの保毒状況を調査したところ、6 地点中 4 地点で保毒虫率が 10%以上と高かった (表 1)。
- ② 県西地域におけるヒメトビウンカの第一世代幼虫ならびに成虫の発生は平年よりやや早く (データ省略)、平年並～やや多い発生である (表 2)。

表 1 ヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率 (%)

調査地点	H23 年	H24 年	H25 年	H26 年	
筑西市	二木成	5.6	26.0	6.7	<b>16.8</b>
	東榎生	—	—	19.7	—
	野田	—	12.5	—	—
	野殿	6.6	—	—	—
結城市	結城	0	1.4	11.5	<b>14.6</b>
桜川市	加茂部	—	—	—	<b>11.9</b>
	原方	—	—	—	<b>11.1</b>
常総市	三坂	—	—	—	<b>6.7</b>
つくば市	大形	—	—	—	<b>9.3</b>

※ラテックス凝集反応法により検定 (—は未調査)

採取月日：平成 26 年 5 月 28 日～6 月 10 日

検定月日：平成 26 年 6 月 12 日

表 2 小麦圃場におけるヒメトビウンカ第一世代の発生状況 (頭)

調査地点	孵化幼虫数 <sup>1)</sup>	すくい取り虫数 <sup>2)</sup>
筑西市 二木成	5.4(平年値 6.0)	54.2 (平年値 46.5)
結城市 結城	25.0(平年値 10.6)	33.0 (平年値 13.4)

1) 4 月下旬に行った小麦 100 茎におけるヒメトビウンカ孵化幼虫数

2) 6 月上旬に行った小麦圃場における 10 回振りすくい取り調査で捕獲した幼虫および成虫数

[病害の特徴]

- ① イネ縞葉枯病の原因となるウイルスはヒメトビウンカにより媒介される。麦畑で増加したヒメトビウンカは水田に移動するため、周辺に麦畑がある水田では特に本病が発生するリスクが高い。

- ② 田植えが遅い水田は生育初期に本病に感染するため、被害が大きくなる傾向がある。  
 (その他、媒介虫の生態等については、平成26年3月14日発表 注意報 第3号を参照)

〔防除上注意すべき事項〕

- ① 昨年、本病の発生が認められた地域で、本年、ウンカ類に登録のある薬剤で育苗箱施薬を行わなかった水田では、6月下旬にヒメトビウンカの防除を行う。なお、薬剤については表3を参照する。

表3 本田でヒメトビウンカの防除に「散布」で使用できる主な薬剤 (平成26年6月11日現在)

薬 剤 名	使用量(10a 当たり) または希釈倍数	剤の 使用回数	有効成分名 (有効成分の総使用回数)
アドマイヤー1粒剤	3kg	2回以内	イミダクロプリド(3回以内) <sup>1)</sup>
ダントツ粒剤	3kg	3回以内	クロチアニジン(4回以内) <sup>2)</sup>
アドマイヤー水和剤	2,000倍	2回以内	イミダクロプリド(3回以内) <sup>1)</sup>
ダントツ水溶剤	4,000倍	3回以内	クロチアニジン(4回以内) <sup>2)</sup>
MR.ジョーカーEW	2,000倍	2回以内	シラフルオフェン(2回以内)
MR.ジョーカー粉剤DL	3~4kg	2回以内	シラフルオフェン(2回以内)

1) 種もみへの処理又は移植時までの処理は1回以内、本田での散布は2回以内

2) 移植時までの処理は1回以内、本田での散布、空中散布、無人ヘリ散布は合計3回以内

※農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項等を必ず確認のうえ使用する。



写真1 イネ縞葉枯病の株での症状



写真2 イネ縞葉枯病の葉での症状



写真3 ヒメトビウンカ成虫 (左) および幼虫 (右)  
 (成虫は体長約3~4mm, 幼虫は体長約1~2mm)